

東百舌鳥陵墓参考地倒木復旧工事に伴う調査

はじめに

東百舌鳥陵墓参考地は、大阪府堺市北区百舌鳥西之町3丁に所在する前方後円墳である。平成30年の台風21号によって、主に後円部1段目と前方部墳頂付近で倒木が発生した。倒木を復旧するにあたっては、根起き箇所において埴輪が露出していることが確認されていたことから、これらの埴輪を回収するとともに、根起き箇所の土層断面を精査して状況を確認する調査を行った。調査は土屋隆史が担当し、濱田武典、角野陽香がこれを補助した。調査期間は、令和2年3月2日～6日である。

なお、今回の報告で使用する座標は、ITRF（国際地球基準座標系）にもとづいた世界測地系の平面直角座標第Ⅶ系をもちいており、図面において使用している方位記号の方角は基本的に座標北である。また、高さの基準には東京湾平均海面（T.P.）をもちいた。

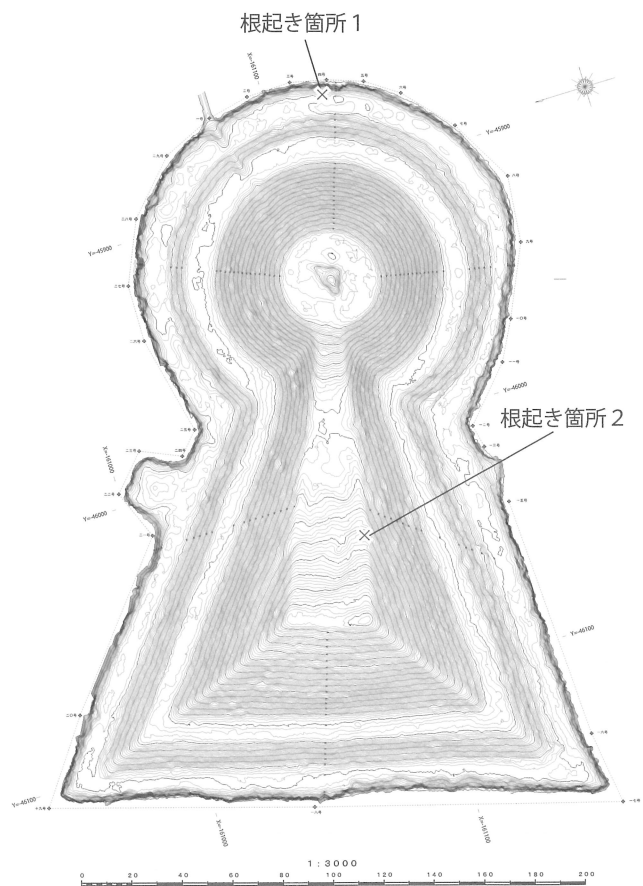
調査の状況

調査箇所は計2箇所、後円部第1段平坦面東側と前方部墳頂南側である（第46図）。それぞれの箇所で詳しく説明する。

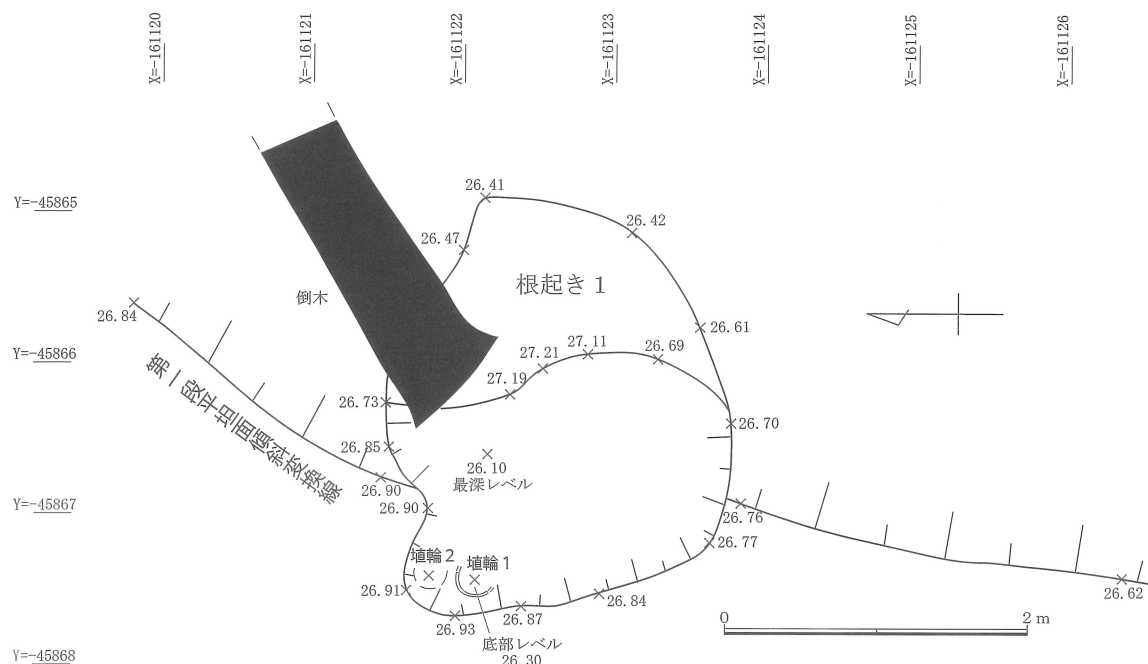
（1）後円部第1段平坦面東側（根起き箇所1）（第47～49図、図版23-1～4、25-1）

墳丘の状況 根起き箇所1は後円部第1段平坦面東側の墳丘主軸に近い箇所であり、第1段平坦面の傾斜変換線の近くに位置する。木が東の濠側に倒れ、第1段平坦面に根起きが生じた。根起き箇所の大きさは、東西長2.8m、南北長2.3mであり、深さは最深部で約0.8mである。精査の結果、上から表土（26.85～26.92m、厚さ7cm）、浚渫土（26.59～26.85m、厚さ26cm）、墳丘流土あるいは墳丘盛土（26.58m以下）を確認した。平成24年度東百舌鳥陵墓参考地整備工事予定区域の事前調査における層序で、それぞれⅠ層、Ⅱa層、ⅢbあるいはⅣ層にあたる⁽¹⁾。

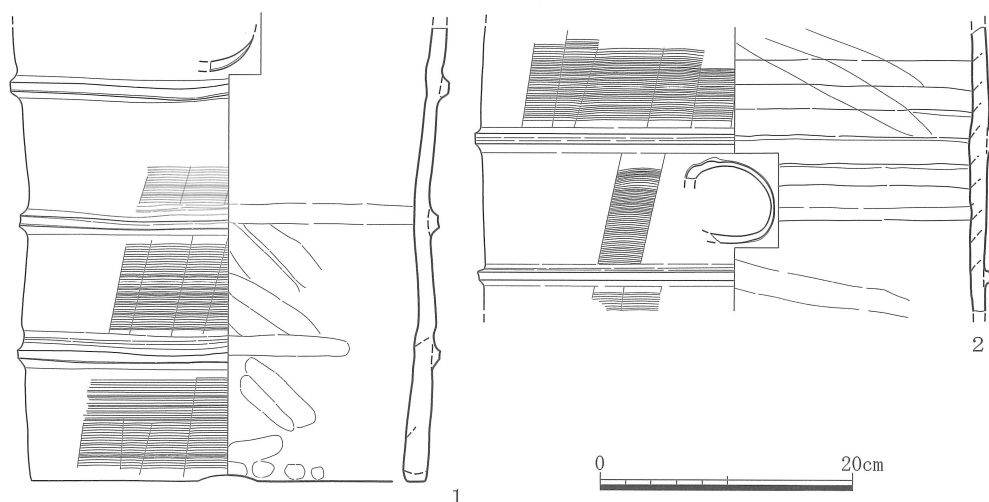
また、根起き箇所の測量をおこなったうえで、根起き部分の土を落としながら、埴輪片を回収することとした。根起き箇所西側からは、原位置の可能性がある円筒埴輪を2個体分（第47図1、2）を確認した。円筒埴輪は、第1段平坦面が第1段斜面へと下る傾斜変換点から、0.6mほど第2段斜面寄りに設置されていた。1の円筒埴輪の設置レベルは26.30mである。これらの円筒埴輪の間隔は、中心同士で計測するとおおむね30cm前後であった。この根起き箇所は、平成24年度における事前調査の第1トレンチのすぐ北側に位置し、根起き箇所1の円筒埴輪が第1トレンチの円筒埴輪列の延長上に位置することがわかる（第49図）。なお、木の根による攪乱が著しかったため、円筒埴輪を設置する際の掘方の有無や、円筒埴輪のどの高さまでが墳丘盛土に埋められていたのかについての情報を得ることはできなかった。



第46図 東百舌鳥陵墓参考地 調査箇所位置図（1/3,000）



第 47 図 東百舌鳥陵墓参考地 根起き箇所 1 平面図 (1/50)

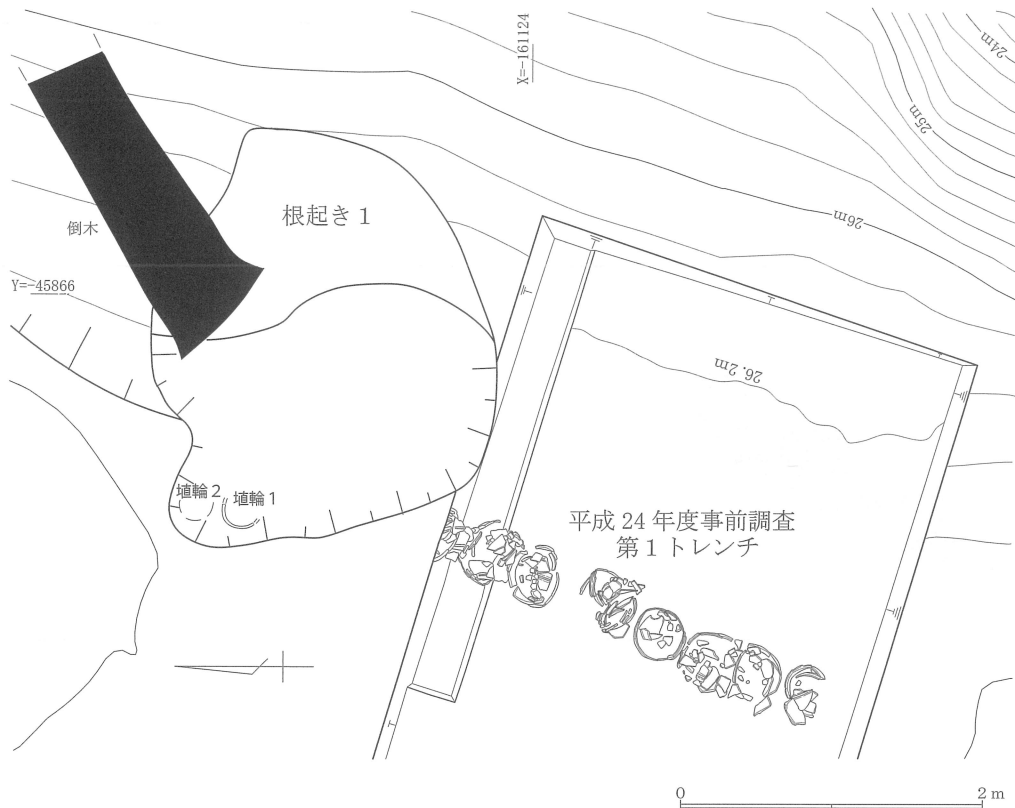


第 48 図 東百舌鳥陵墓参考地 根起き箇所 1 出土品実測図 円筒埴輪 (1/6)

出土遺物 根起き箇所 1 では、後円部第 1 段平坦面に設置された円筒埴輪列を構成していたと考えられる埴輪の破片が多数出土した。埴輪はすべて窖窯焼成によるもので、黒斑はみられない。1 と 2 は原位置を保った状態で出土した円筒埴輪である。1 は底部から第 4 段目までが残存している。底径は 31.4cm、胴部の直径は 32.0 ～ 34.5cm、突帯間隔は 10.7cm、第 1 段高は 10.0cm である。透孔は円形であり、第 4 段にみられる。残存の範囲内では、第 1 ～ 3 段には透孔は確認できず、一番下の透孔が第 4 段であったようである。同様の特徴は当参考地においてこれまでも確認されている⁽²⁾。外面調整は B c 種ヨコハケ、内面調整は左斜め上方向のナデであり、突帯の裏には横方向のナデが確認できる。2 は底部が確認されなかったため、どの段のものであるかが確定できない。胴部の復元径は 39.5 ～ 40.3cm で、突帯間隔は 11.0cm である。1 と比べて径がやや大きい。透孔は円形である。外面調整は B c 種ヨコハケである。内面には粘土紐の接合痕が残っており、左斜め上方向のナデがみられる。

(2) 前方部墳頂 (根起き箇所 2) (第 50～56 図、図版 23-5 ～ 8、24、25-2 ～ 3、26～28)

墳丘の状況 根起き箇所 2 は前方部墳頂の南側であり、前方部墳頂から第 3 段斜面へ下る傾斜変換点の近



第 49 図 東百舌鳥陵墓参考地 後門部第 1 段平坦面東側における円筒埴輪列 (1/50)

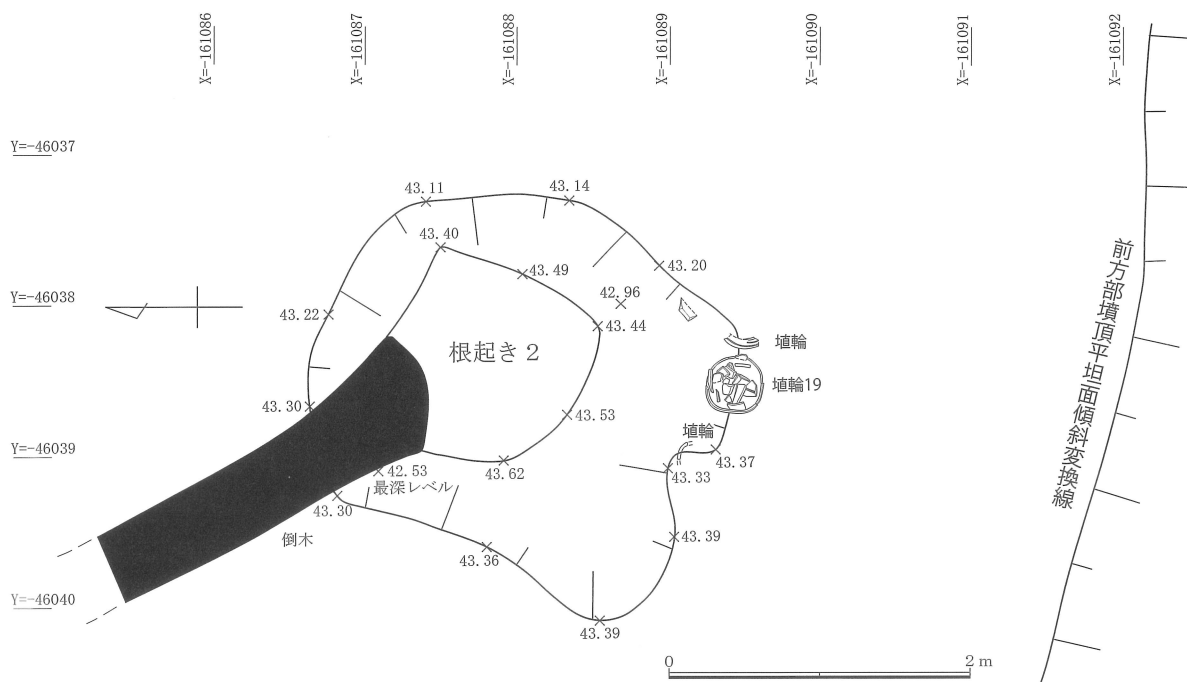
くに位置する。木が北東側に倒れて根起きが生じた後、自重により根起き箇所にも木が落ち込んだ状態になっていた。根起き箇所の大きさは、東西長 2.8 m、南北 2.8 m であり、深さ約 0.2 ～ 0.8 m である（第 50 図）。

また、根起き箇所南側の墳丘盛土からは原位置の可能性のある円筒埴輪 3 個体分を確認した。前方部墳頂から第 3 段斜面へ下る傾斜変換点から 2.5 m ほど北側寄りに位置し、傾斜変換線と平行方向に列をなしている。中央の個体は根起きにより大部分が露出していたため、記録化したうえで取り上げた（第 54 図 19）。精査の結果、層位は表土（43.34 ～ 43.41 m、厚さ 7 cm）、流土（43.15 ～ 43.34 m、厚さ 19 cm）、墳丘盛土（43.14 m 以下）で、墳丘盛土への埴輪設置レベルは 43.00 m である（第 51 図）。埴輪の外側、内側ともに一段目突帯（43.15 m 付近）まで墳丘盛土が埋められていた。明確な掘方は確認できないことから、墳丘盛土の過程で埴輪が設置されたのであろう。埴輪の外側、内側の流土中からは、蓋形埴輪の破片が多く出土したことから、この円筒埴輪の上には蓋形埴輪が載せられていた可能性が高い。

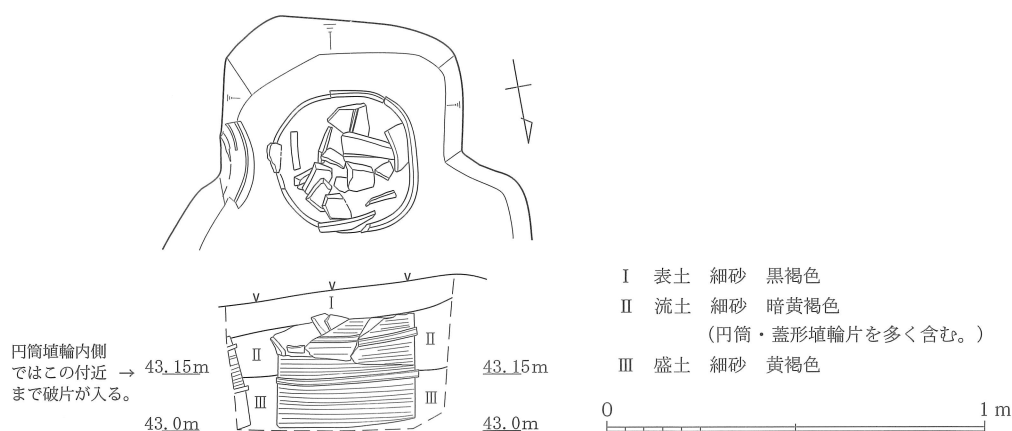
これら以外にも根起き箇所 2 からは円筒埴輪片が多数出土した。原位置を保ってはいなかったため具体的な場所は特定できなかったが、この付近に設置されていた複数個体の円筒埴輪が根起きに巻き込まれたようである。

出土遺物 根起き箇所 2 では、前方部墳頂に設置された円筒埴輪、朝顔形埴輪、蓋形埴輪を構成していたと考えられる破片が多数出土した。埴輪はすべて窖窯焼成によるもので、黒斑はみられない。19 は原位置の状態で出土した個体である。底部から第 3 段目までが残存している。底径は 34.9 cm、胴部の直径は 34.9 ～ 37.2 cm、突帯間隔は 10.6 ～ 11.0 cm、第 1 段高は 9.6 cm である。第 1 ～ 3 段には透孔は確認できない。おそらく一番下の透孔が第 4 段であったと考えられる。外面には 1 次調整タテハケの後に 2 次調整 B d 種ヨコハケがほどこされる。とくに第 1 段にはタテハケがよく残存している。内面調整は左斜め上方向のナデであり、底部にはタテナデがみられる。

また同一個体であるかは確定できないが、18 は口縁部の破片である。残存部分は僅かであるが、復元口径約 48.4 cm であり、19 よりも径が大きい。外面調整はヨコハケであり、静止痕は明確でない。口縁はやや



第 50 図 東百舌鳥陵墓参考地 根起き箇所 2 平面図 (1/50)



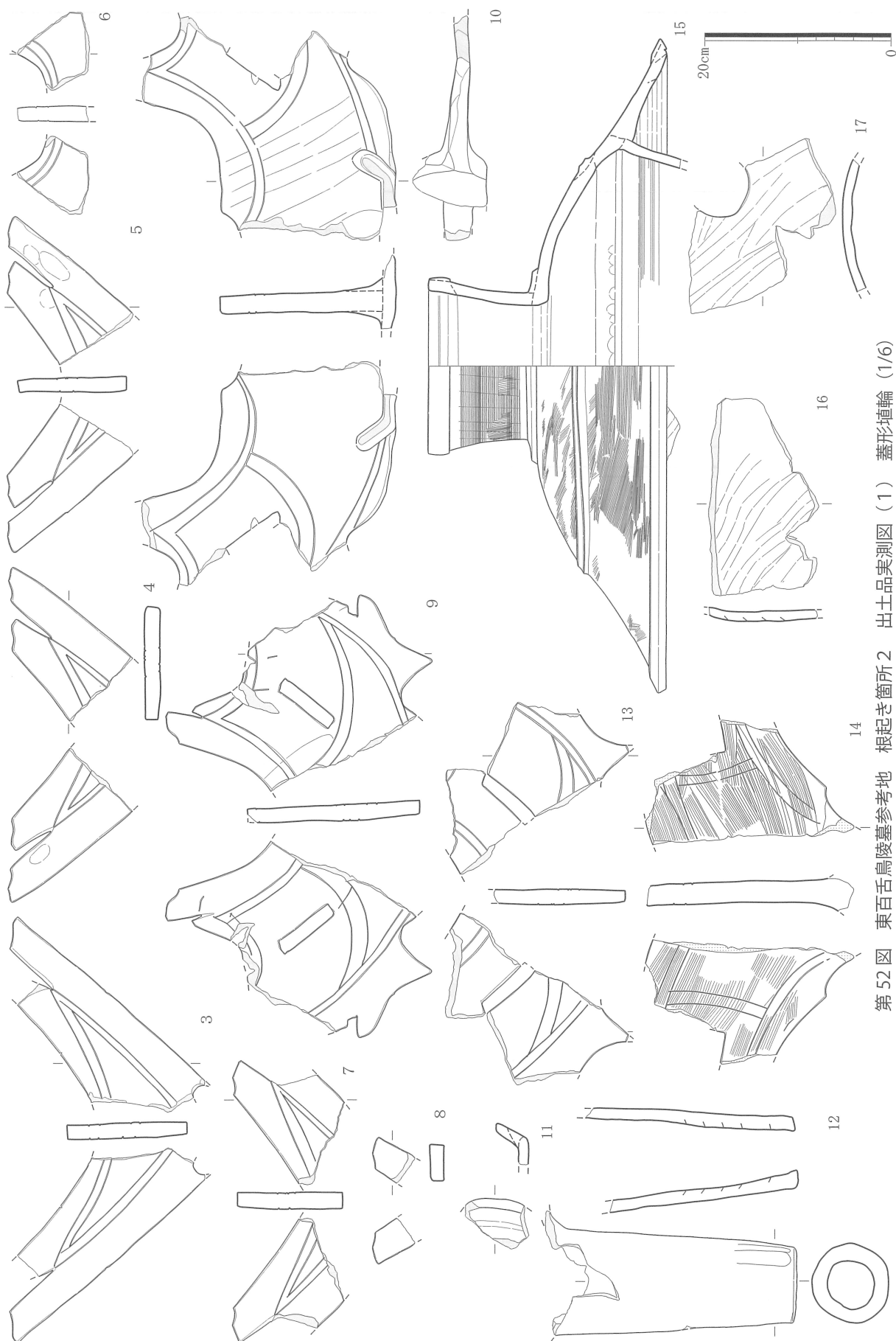
第 51 図 東百舌鳥陵墓参考地 根起き箇所 2 埴輪列平面図・立面図・土層図 (1/20)

外反し、端部には突帯が貼り付けられる。上に載せられた蓋形埴輪を支えるためのものであろうか。

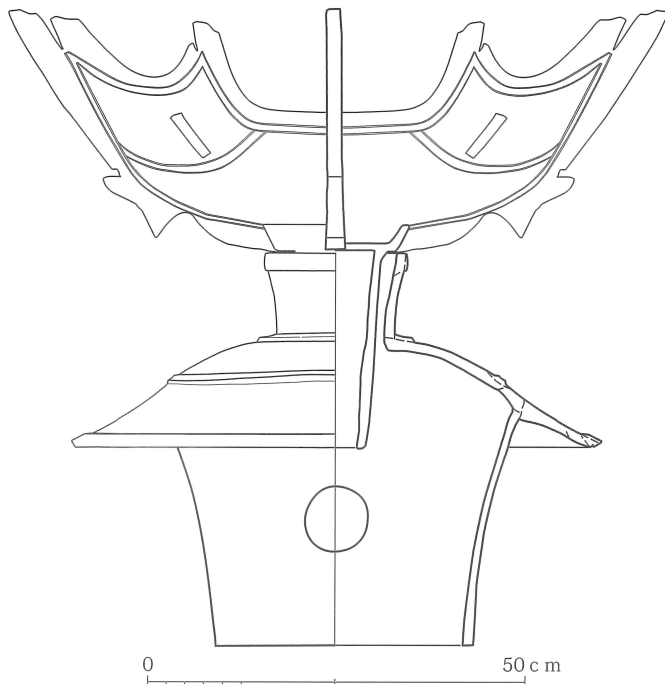
原位置の円筒埴輪の内側と周辺からは蓋形埴輪の破片が多数出土した。蓋形埴輪の部位名称と型式名については、小栗明彦氏の研究を参考にする⁽³⁾。軸受部と笠部 (15)、台部 (16、17)、立ち飾り部 (3～14) が確認できる。有立飾式無肋木の蓋形埴輪に相当する。軸受部と笠部は 1/4 ほどが残存しているため、図上で復元することができた。全体の復元案は第 53 図である。

軸受部口縁径 19.1cm、笠縁径 70.4cm である。軸受部は口縁に突帯がつき、外面 1 次調整はタテハケ、2 次調整は B c 種ヨコハケである。軸受部下端突帯は、笠部側の接着面が広い扁平突帯である。笠部は、笠部中位突帯によって笠上半部と笠下半部にわけられる (小栗分類 X)。笠縁先端には 1 条の突帯がめぐらされている (小栗分類 P)。笠上半部と笠下半部には、外面 1 次調整として左斜め上方向のハケ、2 次調整としてヨコハケがみられる。布張り表現や肋木はみられない (小栗分類笠部 D 類)。笠部は小栗分類の D X P 型式に相当する。

また、立ち飾り部の飾り板 (3～10、13、14)、飾り板受部と軸 (11、12) の破片が確認できる。飾り板は頂辺、内側鱗、外側下鱗がみられ、外側上鱗は飾り板と 6cm ほどの切り込みで分離されて表現されている。



第52図 東百舌鳥陵墓参考地 根起き箇所2 出土品実測図 (1) 蓋形埴輪 (1/6)



第53図 東百舌鳥陵墓参考地 根起き箇所2出土
蓋形埴輪の復元案 (1/10)

外側上縁は直線的で縦に長く、上端は飾り板頂辺よりもやや上方に伸長し、扁平なS字を描く。外側下縁はS字を描いた縦に長い形態である。飾り板頂辺は深く内傾する弧を描いて内側縁にいたり、わずかに切り込みが入ることで飾り板と内側縁が区分されている。内側縁の上端は扁平なS字を描く。立ち飾り部は小栗分類Ⅱf型式に近い。

飾り板の文様は、いわゆる「用形文」の系統のもので、縦帯はない。飾り板と縁が区別され、飾り板にのみ文様がみられる。飾り板外形の文様は二線ではどこされている。残存状態のよい9、10、13をみると、上中位2列の横帯が二線帯となった文様で、上位と中位の区画には長方形透孔があったことがわかる。下位の横帯がなく、中位と下位の区画の長方形透孔も確認できない点が特徴である。

14は二線帯の横帯とその上に長方形透孔がみられる。飾り板受部の近くの破片である

ことから、横帯は下位のもので、長方形透孔は中位と下位の区画に設けられたものであると考えられる。また14の飾り板にのみ外面調整斜め方向のハケがみられる。他の飾り板にはみられない特徴であり、14だけは別個体の可能性が考えられる。これらは小栗分類a5（2透孔）、a6文様（1透孔）に近いが、厳密には該当するものがみられない。

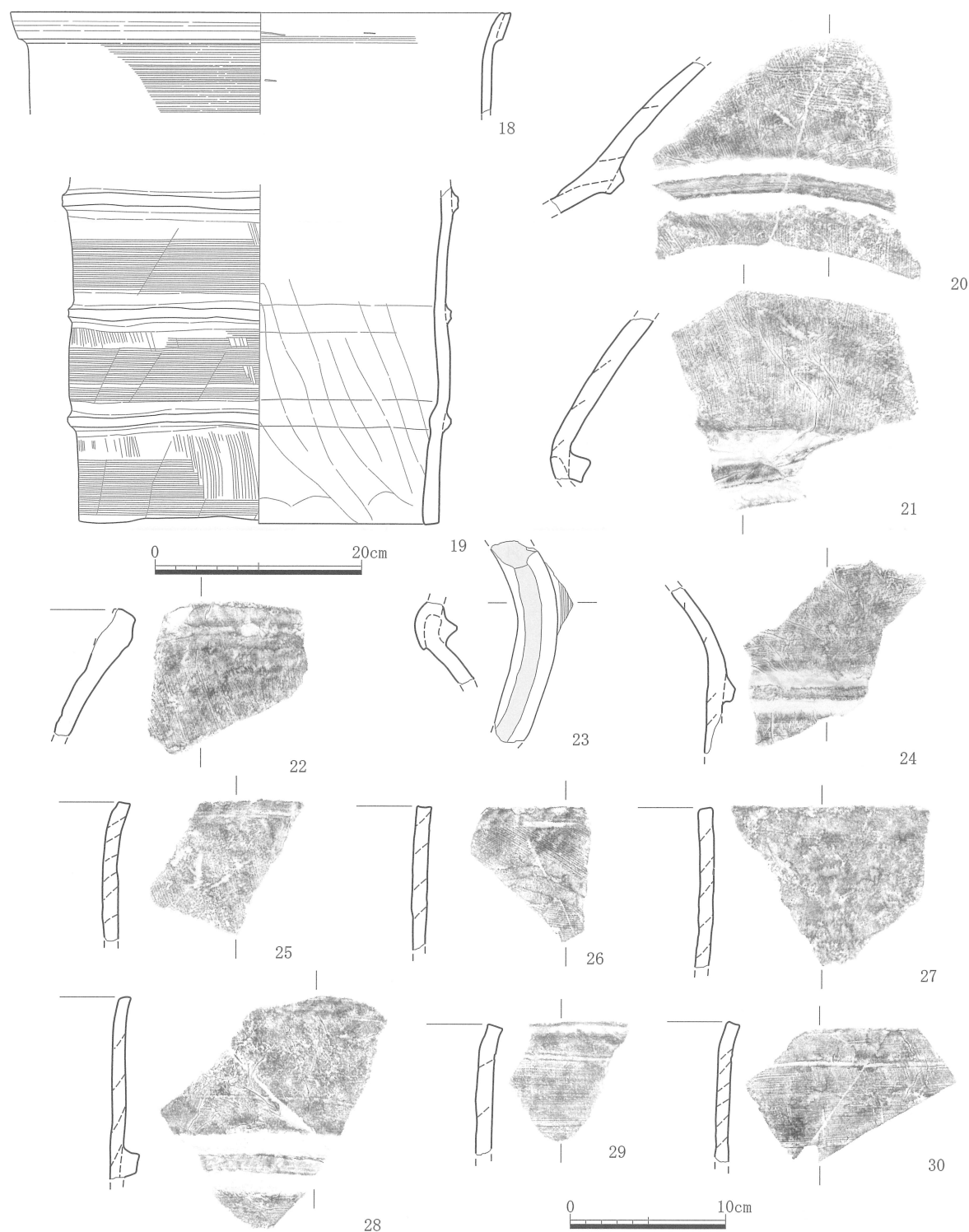
また、飾り板の軸（11、12）は大部分が残存していた。粘土紐の接合痕がよく観察できる。

笠部と立ち飾り部の特徴をふまえると、小栗編年6段階の事例であろう。京都府弓田遺跡B地区SD95062例⁽⁴⁾に近いといえる。

他にも、この付近に設置されていた円筒埴輪片が多数出土した。以下では、残存率の高い破片、部位を特定できる破片を中心に紹介していくこととする。なお、これらが同一個体かを確定することができないが、色調では黄褐色（20～28、31～37）、暗褐色（29、30）、赤褐色（38～45）に区分できる。

20～24は朝顔形埴輪の壺部の破片である。20は口縁部突帯近くの破片である。外面1次調整はタテハケであり、二次口縁には部分的に2次調整ヨコハケが確認できる。内面上半にはヨコハケ、下半にはヨコナデがみられる。21は頸部突帯近くの破片である。外面調整のタテハケのみが確認できる。22は二次口縁の端部であろう。外面には左斜め上方向のタテハケ、内面下半にはヨコハケがみられる。23は頸部突帯と肩部の破片である。肩部外面にはヨコハケがみられる。24は肩部突帯近くの破片である。外面調整Bd種ヨコハケがみられ、内面の突帯裏にはヨコナデ、肩部にはタテナデがみられる。

25～30は円筒埴輪の口縁部である。25の端部は外反し、端部外面にはヨコナデ、外面下半と内面下半にはタテハケがみられる。26は直立した口縁であり、外面上半には左斜め上方向のハケ、下半にはヨコハケがみられ、端部ではその上から横方向の凹線、下半ではヨコナデがほどこされる。内面には左斜め上方向のハケがみられる。27は直立する口縁である。端部外面にはヨコナデ調整、その下には1次調整タテハケ、2次調整ヨコハケがみられる。端部内面にはヨコナデ、その下にタテナデがみられる。28はわずかに外反する口縁である。端部外面にはヨコナデ、下半にはヨコハケがあり、突帯の上側には凹線がみられる。内面上半には左斜め上方向のハケがみられる。29は外反する口縁である。端部外面にはヨコナデ、下半にはヨコハケがみられ、端部付近には凹線がみられる。内面には端部にヨコナデ、その下に左斜め上方向のハケ、

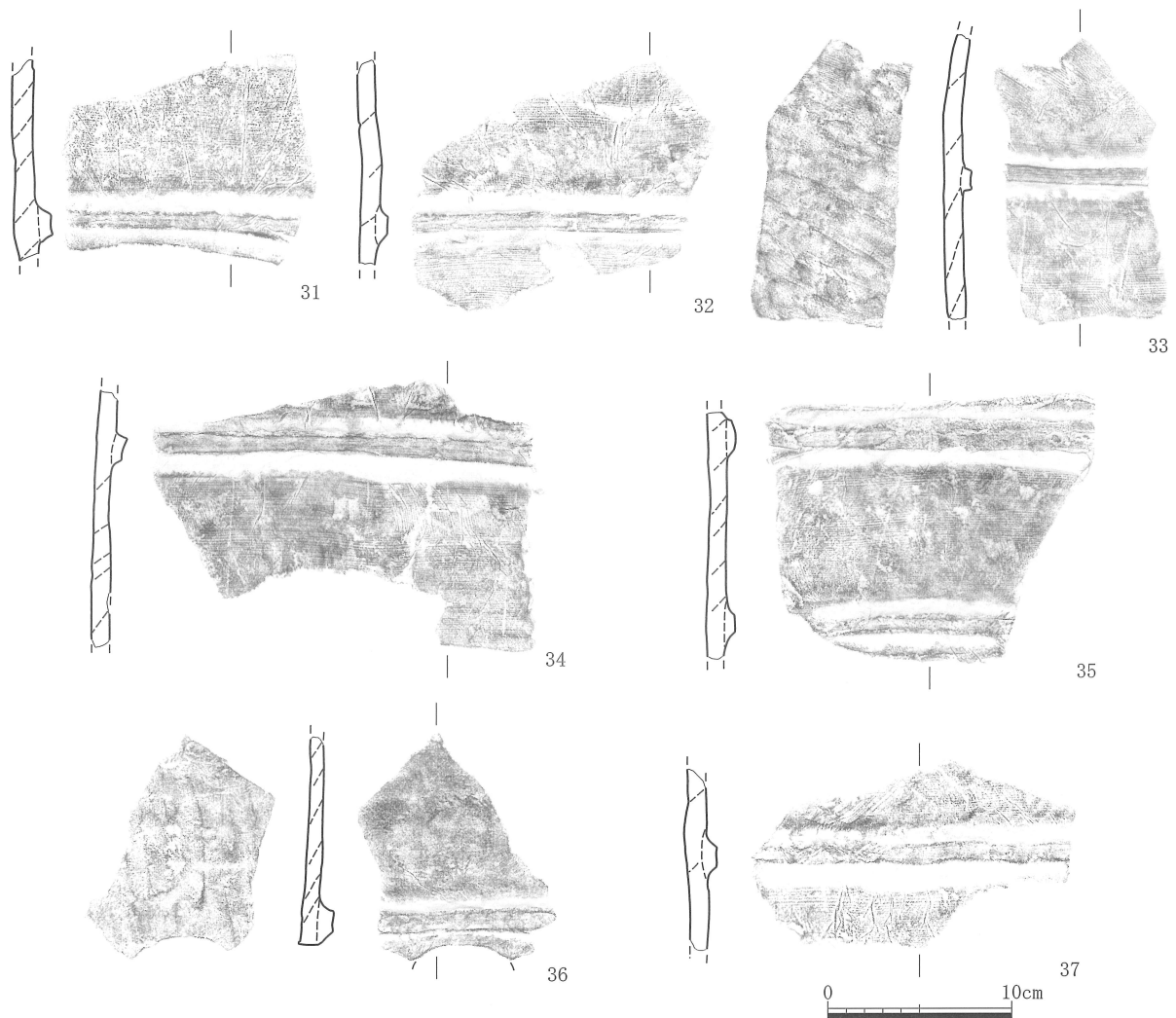


第 54 図 東百舌鳥陵墓参考地 根起き箇所 2 出土品実測図 (2) 円筒埴輪 (18,19 は 1/6、その他は 1/4)

下半にはヨコナデがみられる。30 は外反する口縁である。端部にはヨコナデ調整、その下には外面 1 次調整タテハケ、2 次調整 B c 種ヨコハケがみられる。端部ではその上から凹線がみられる。内面には端部にヨコナデ、その下に左斜め上方向のハケがみられる。

31 ～ 45 は円筒埴輪の胴部である。基本的な調整として、外面には 1 次調整タテハケ、2 次調整には静止痕がやや傾く B c 種あるいは B d 種ヨコハケ、内面には左斜め上方向のナデがみられる。

31 ～ 37 は黄褐色の個体である。31 の上端には突帯下のヨコナデ調整がみられ、突帯間隔は約 10cm である。



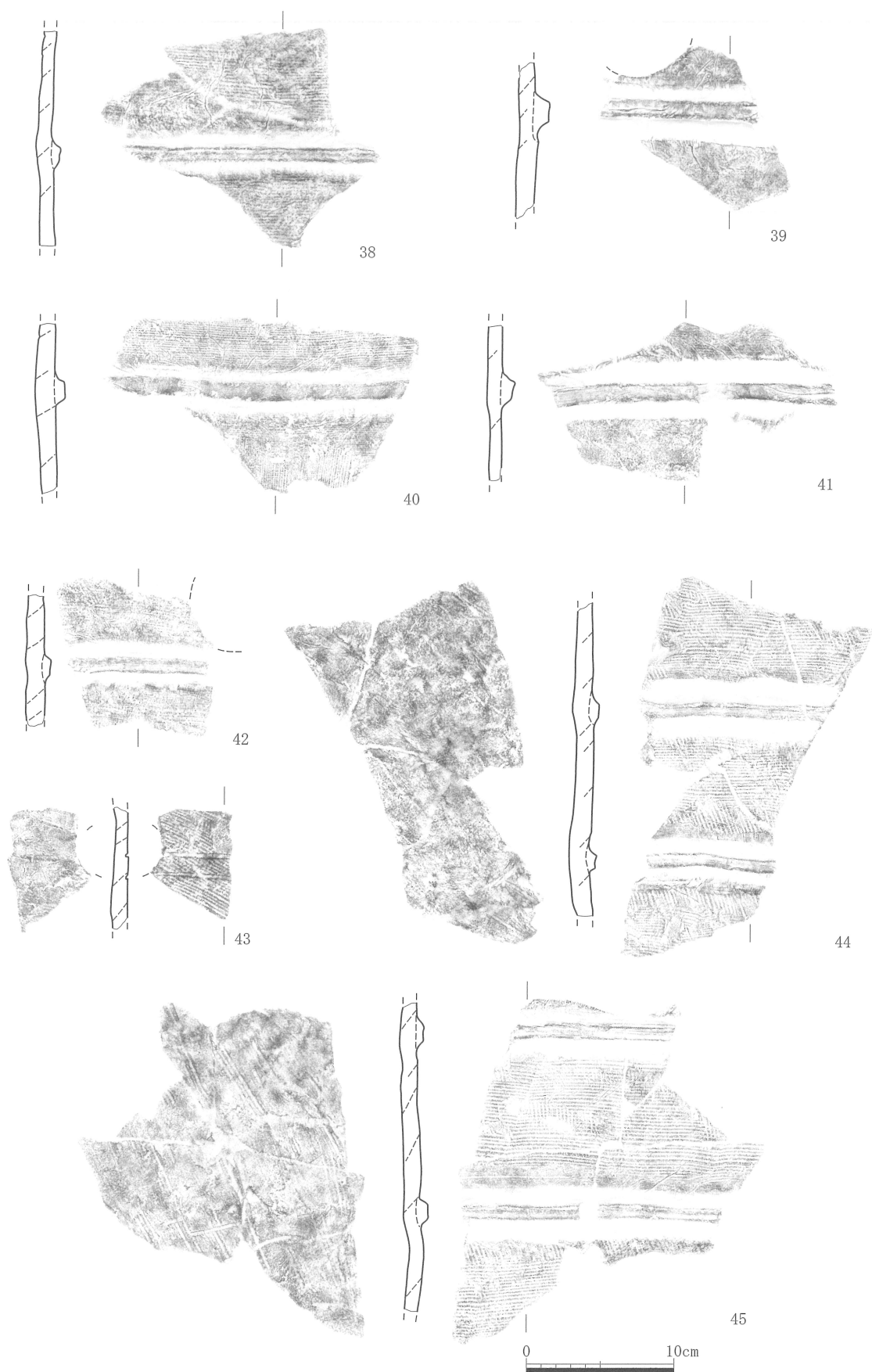
第55図 東百舌鳥陵墓参考地 根起き箇所2 出土品実測図(3) 円筒埴輪(1/4)

32 には内面にも 1 次調整タテハケ、2 次調整ヨコハケがみられる。33 の外面上側には弧を描くヘラ記号がみられる。内面 1 次調整がヨコナデ、2 次調整がヨコハケである。34 の下端には突帯上のヨコナデ調整がみられ、突帯間隔は約 11cm である。内面 1 次調整は左斜め上方向のナデ、2 次調整が左斜め上方向のハケである。35 は突帯間隔が 10.2cm である。

38～45 は赤褐色の個体である。43 は外面 1 次調整がタテハケ、2 次調整が左斜め上方向のハケであり、これらの上から横方向の凹線が 2 本ほどこされている。左側には円形透孔がみられる。他の円筒埴輪にはみられない特徴であり、形象埴輪の破片である可能性もある。44 は 3 段分が残存しており、突帯間隔は 10.2cm である。45 も 3 段分が残存しており、突帯間隔は 12.2cm である。内面には左斜め上方向のナデ調整とともについたと考えられる太い 2～3 本の条痕がみられる点が特徴である。44 と色調はよく似ているが、突帯間隔や内面調整が異なることから別個体であろう。

まとめ

当参考地の埴輪についてはこれまでも多数報告されているが、今回の調査により前方部墳頂における埴輪を新たに確認した。前方部墳頂で原位置を保ったまま出土した円筒埴輪の上には、蓋形埴輪が載せられていた可能性が高い。蓋形埴輪は立ち飾り部から笠部にいたるまでの破片が多く出土したため、全形の復元案を示すことができた。立ち飾り部の飾り板には、下位の横帯がなく、中位と下位の区画の長方形透孔もみられないというあまり類例のない特徴がみられる。当該期における蓋形埴輪の様相を知るうえで、貴重な事例



第56図 東百舌鳥陵墓参考地 根起き箇所2 出土品実測図(4) 円筒埴輪(1/4)

となるだろう。また円筒埴輪は、これまでに確認されている傾向から大きく逸脱しないものであった。

このように倒木の状況を調査し、露出した遺物を取り上げて記録化した。今後、折をみて倒木処理を実施する予定である。

(土屋隆史)

註

- (1) 徳田誠志・清喜裕二・加藤一郎・横田真吾・土屋隆史「東百舌鳥陵墓参考地整備工事予定区域の事前調査」『書陵部紀要』第65号〔陵墓篇〕、2014年。
- (2) 註(1)に同じ。
- (3) 小栗明彦「蓋形埴輪編年論」『埴輪論考Ⅰ』(大阪大谷大学博物館報告書第53冊)、2007年。
- (4) 橋本 稔・辻本和美「弓田遺跡第2次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第74冊、京都府埋蔵文化財調査研究センター、1997年。



1 根起き箇所1 調査前全景（南西から）



2 根起き箇所1 調査過程全景（南から）



3 根起き箇所1 調査後土層（東から）



4 根起き箇所1 調査後全景（南から）



5 根起き箇所2 調査前全景（南東から）



6 根起き箇所2 調査過程全景（東から）



7 根起き箇所2 埴輪列検出状況1（北から）



8 根起き箇所2 埴輪列検出状況2（北から）



1 根起き箇所 2 埴輪列検出状況 3 (北から)



2 根起き箇所 2 埴輪列検出状況 (上から)



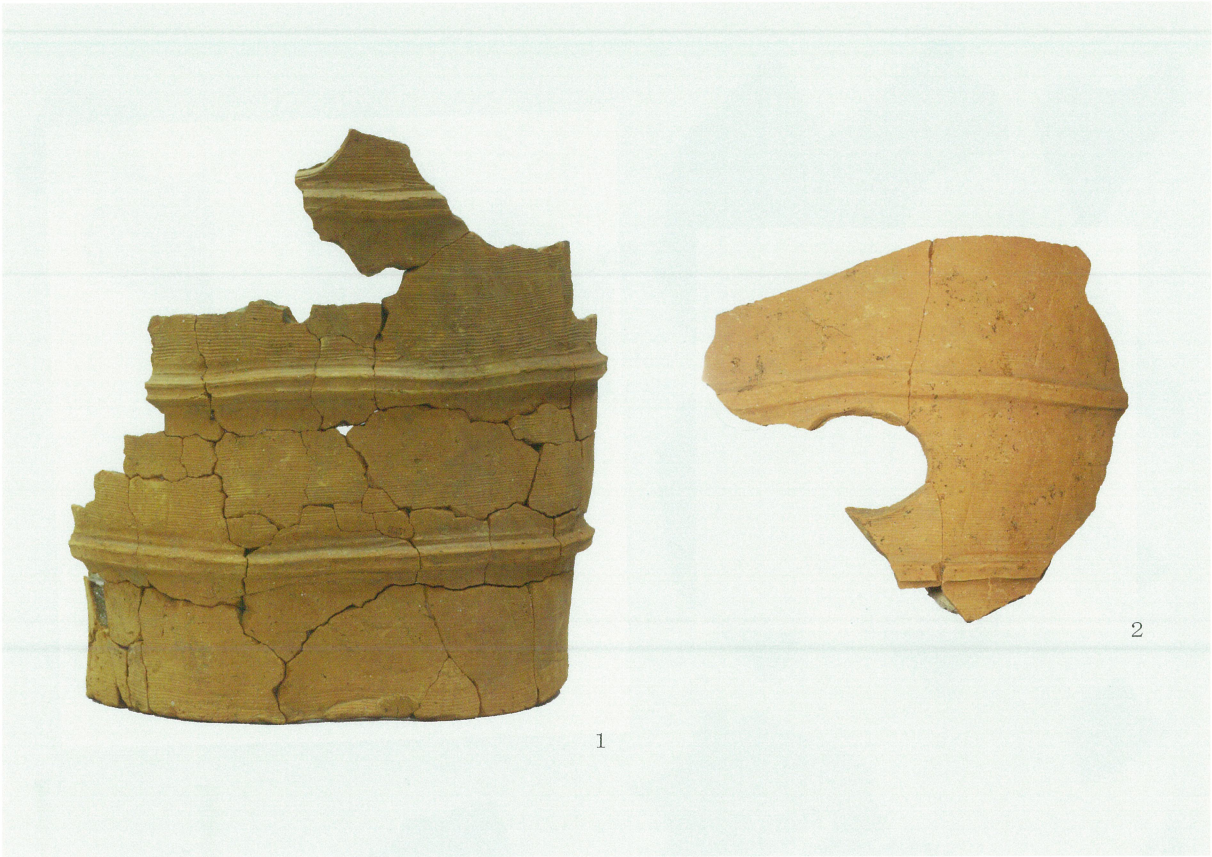
3 根起き箇所 2 埴輪列検出状況 (西から)



4 根起き箇所 2 埴輪列設置箇所土層 (北から)



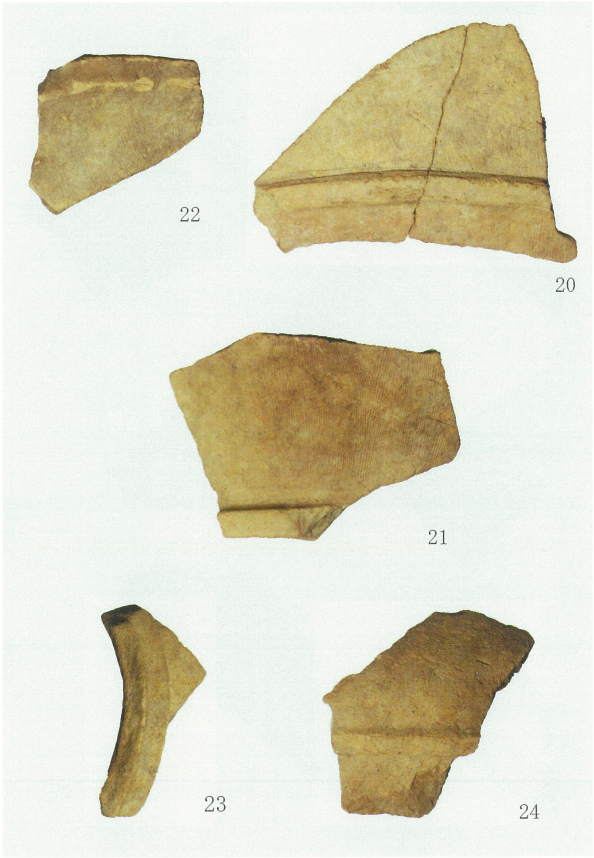
5 根起き箇所 2 調査後全景 (東から)



1 根起き箇所1出土円筒埴輪（1， 2）



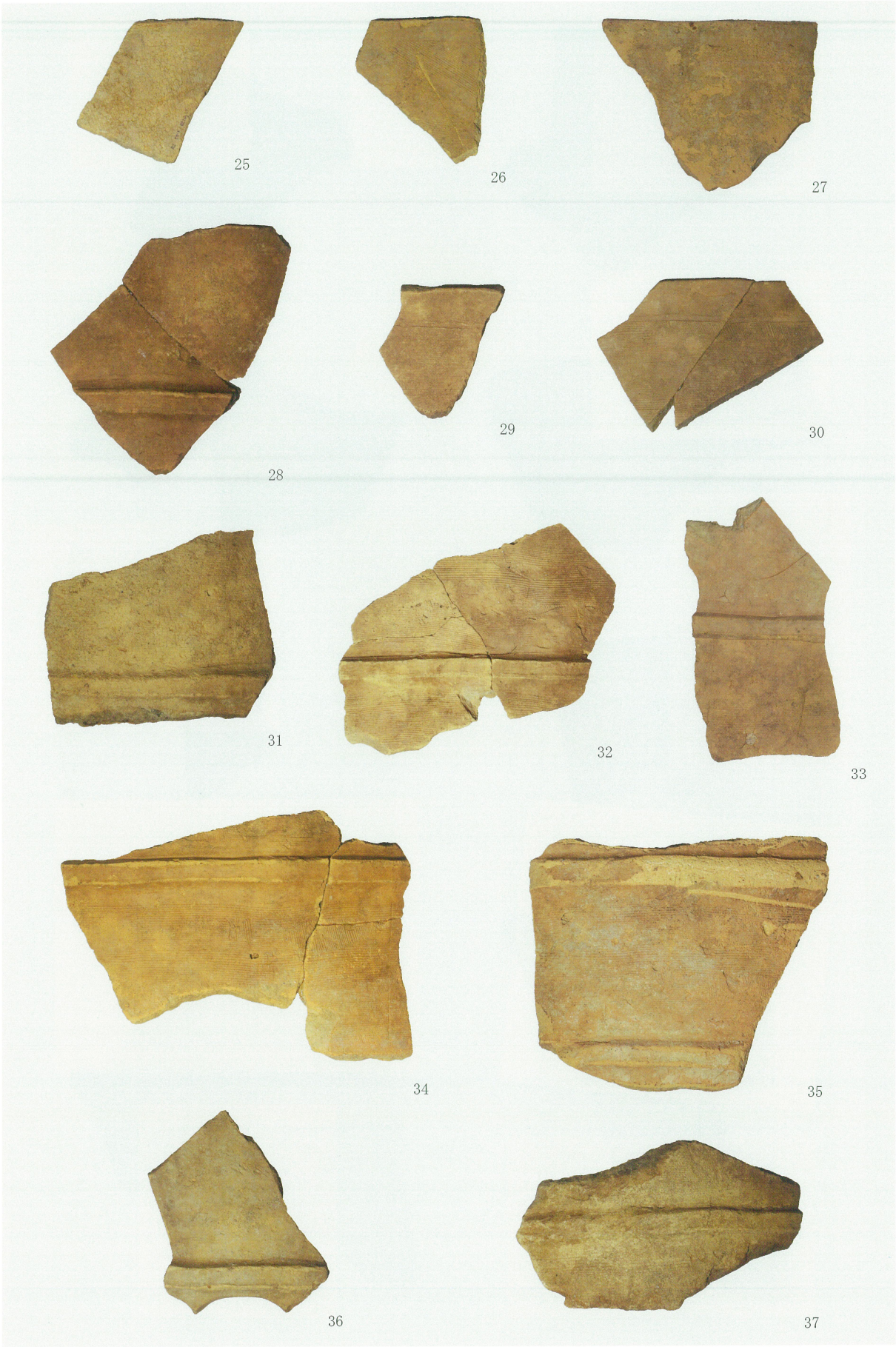
2 根起き箇所2出土円筒埴輪（18， 19）



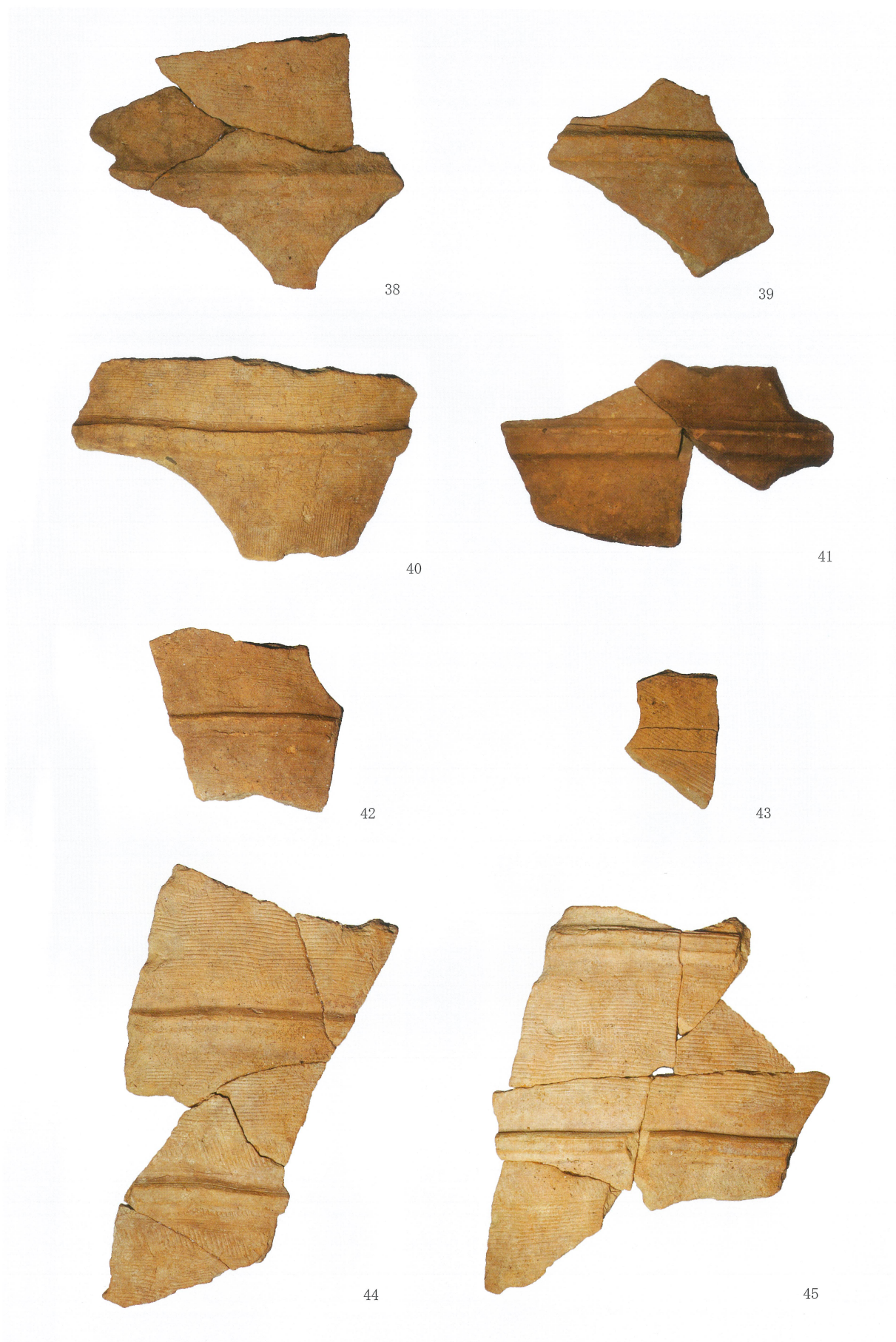
3 根起き箇所2出土円筒埴輪（20～24）



1 根起き箇所 2 出土蓋形埴輪 (3～17)



1 根起き箇所 2 出土円筒埴輪 (25 ~ 37)



1 根起き箇所 2 出土円筒埴輪 (38 ~ 45)